

団体移住により拓かれた由緒あるまちの歴史を学ぶ 新十津川町開拓記念館

新十津川町 教育委員会事務局 社会教育グループ 加藤 和仁



HPはこちら



新十津川町の概要

新十津川町は、札幌市から国道275号を北上し、車で約1時間45分、道央空知のほぼ中央部、樺戸郡の北端、石狩川の右岸に位置し、東西約35km、南北約30km、面積は495.62km²です。



東西に横切る石狩川の右岸、中央を流れるのは徳富川

東は石狩川を隔てて滝川市、砂川市及び奈井江町と相對し、西はピンネシリと暑寒別岳を有する樺戸（増毛）山地の稜線で当別町と石狩市に接し、北は尾白利加川を境に雨竜町と南は樺戸境川を境界に浦臼町と接しています。

1889（明治22）年の奈良県十津川郷で起きた未曾有の大水害という悲劇を契機として、600戸、2,489人の大集団移住によって開村、奈良県十津川村にちなみ、ここに新しい十津川をつくるとの思いを込めて「新十津川」と命名し、奈良県十津川村を「母村」と呼びました。その後、北陸、東北地方からも移住があり、開墾が更に進みました。以来、石狩川及び徳富川流域の肥沃な平野部や丘陵地など、恵まれた土地資源を活かした農業を基幹産業として発展しています。

ようこそ新十津川町開拓記念館へ

新十津川町開拓記念館（以下「記念館」）は、新十津川町開基77周年事業として1966（昭和41）年に新十津川信用売買組合の建物を改造して設置（現新十津川町農業記念館）したのち、より充実した記念館とするため、開基90周年事業として1980（昭和55）年に現在の記念館を設置しました。

団体移住によって拓かれた不屈の精神と新天地にかける大きな夢でつづられた貴重な文化遺産をご覧ください。

住所	樺戸郡新十津川町字中央1番地1	
電話	0125-76-2622	
開館期間	5月1日から10月30日まで 月曜日閉館（祝日の場合は翌日）	
開館時間	午前10時から午後4時まで ※金曜日は午後1時まで	
年間来客者数	1,052人（令和7年度）	

入場料区分	個人	10人以上の団体
小・中学生	100円	1人につき50円
高校生以上	200円	1人につき100円

新十津川の自然と歴史

記念館の展示は、十津川移民の開拓以前に遠くさかのぼるところから始まります。一面の原始林に野生動物が住みつき、近世から近代初頭にかけては、アイヌ民族が先住者として生活していました。

また、それよりもっと古い縄文時代には、「縄文文化人」「続縄文文化人」と呼ばれる人々が残した遺物も展示しています。



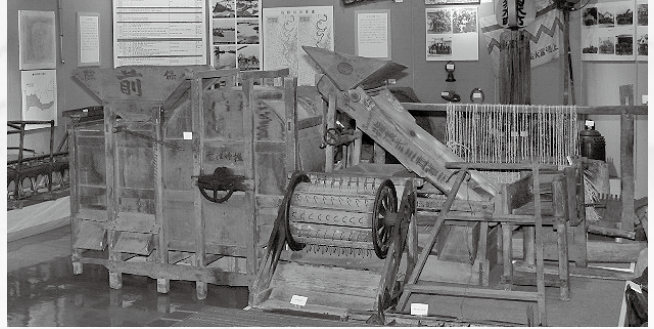
来館者を野生動物のはく製が迎える

団体移住と開拓の歴史

母村、奈良県十津川村での災害を受けた人々は、当時開拓地として注目を浴びていた北海道への団体移住を決め、入植した年は、そば、大根程度の作付けでしたが、翌年からは麦、とうもろこし、アワ、大豆などの自家食用作物を栽培、入植から3年後には、大型の農機具も取得し、小豆、小麦、亜麻などの販売作物の栽培も開始しましたが、1897（明治30）年、夜盗虫（ヨトウムシ）の大発生による畑作被害を契機に栽培作物は稲作へと変わっていきます。

記念館では、畑作から害虫被害の少ない稲作へと変遷していく過程の貴重な農機具などを展示しています。

また、1890（明治23）年に入植した移住者は開拓と同時に学校の建設にも取りかかり、翌年3月に2校の簡易小学校を開校するなど、子どもたちの教育にも大きな努力が払われました。当時の様子を再現した教室や教科書なども展示しています。



入植時から使用されていた貴重な農機具を多数展示

村から町へ～新十津川の発展～

大正期に入ると人口も15,000人を超え、昭和期に入ってから、冷害と凶作、戦争という厳しい時代を乗り越えてきました。そして、1957（昭和32）年には、待望の町制が施行され、生活環境の向上が図られるようになりました。

明日の新十津川町

記念館では、これまでの新十津川町の歩みを振り返り、「母村」十津川村の風習、伝統、文化、そして歴史の源を同じくする人々の気概が、新十津川町に根付いていることを、今に伝えてくれています。

ご一読いただいた機会に、ぜひご来館ください。



新十津川町無形民俗文化財である「獅子神楽」も展示